



(医)潤心会理事長(岩手県)

鈴木千枝子 ⑤



私は昭和60年、3歳年下の主人と結婚した。出会いは学生時代の軟庭部。5年生の私は、1年生の主人と恋に落ちた。今も忘れない。山中湖畔での歯学部、女子部員が2人しかいないため、個人戦にのみ出場した私たちペアは、男子とばかり練習してい

たおかげで圧倒で優勝した。その時1年生でありながら、男子決勝まで勝ち上がったのが主人だった。それから5年後、彼が6年生の時、学生結婚したのだ。

卒後、補綴科に残った彼は、腕の良い職人気質の歯科医師になった。丁寧の良い補綴物を患者がキシリトールに残った彼は、腕の町内の保健センターや小学校、公民館の老人クラブ、いたる所

歯医者が嫌いだった①

さんに装着していたが、何年かすると二次カリエスや歯周病でだめになる。「どんなに良い物を入れてもダメになる。修復ばかりの歯科医師じゃダメだ。患者さんに知識を与え、共に口腔を守っていく。これからは予防の時代だ」。彼の言葉に背中を押され、「子育て歯科」で出会った倉

で「むし歯予防とキシリトール」について講演して回った。キシリトールのマイブームが沈静化し、キシリトールガムが世間で当たり前になり、噛まれるようになったところ、主人が亡くなった。間質性肺炎、45歳の若さだった。出会ってから25年目の別れだった。

「これからは予防の時代だ」。彼の言葉が今もいつも頭の中にある。彼は私の腕の中で事切れた。その瞬間、彼の魂が私に乗り移ったんだと思う。私は変わった。彼の死から半年後、熊谷崇先生のオーラルフィジシャンコースを受講。何かを一心不乱にやっていたら悲しみでつぶされそうだった私は、予防型歯科医院建設に邁進し、彼の死から2年後の平成18年、歯科衛生士の業務を医院の中心においた現在の医院を立ち上げた。

「鈴木潤」。主人の名前からとった「医療法人潤心会」。今は毎日患者さんの笑顔を見るため、働いている。子供のころ嫌いだった歯医者が大好きな仕事になった。